

「まことの食べ物、まことの飲み物」

ヨハネの福音書 6:46～71

1. 父を見る

6:46 だれも父を見た者はありません。ただ神から出た者、すなわち、この者だけが、父を見たのです。

父はヘブル語でアーヴ(אָב)です。神様を直接的に表すアーレフ(א)と、家、国を表すベート(ב)が組み合わさった言葉です。つまり父、アーヴとは神の家、神の国という意味があります。それをイエシュアは「見た」と言われていますが、この「見る」と訳されているヘブル語のラーアー(הִיאָר)は単に肉眼で見ることだけでなく、「示す、理解する」という意味もあり、「父を見た」という行為が、父の姿形を見たというよりもむしろ「父がなそうとしておられることを理解した」、つまり神の国を建てるといご計画の全てを見、そして理解したという意味であると考えられます。ちなみにこのラーアーが初めて使われている箇所は創世記 1:4 です。

創世記

1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

神は光を「見た」という、これが最初のラーアーです。光はヘブル語でオール(אור)で、神様のお考え、ご計画を意味する言葉であることを以前述べました。つまり神様はご計画を持たれたのです。そして御子であるイエシュアもそれをラーアー、見た、理解したのです。このラーアー(הִיאָר)という言葉は構成する三つのヘブル文字についても見てみましょう。

レーシュ(ר)…頭を象った文字です。考え、計画、かしらという意味があります

アーレフ(א)…雄牛の頭を象った文字です。力ある神という意味があります。

ヘー(ה)…窓を象った文字です。見る、生きる(息をする)という意味があります。

これら三つの意味を合わせると「計画によって神を見る」「計画のために神は生きる」というようなメッセージを導き出すことができます。神様という御方は、そのご計画だけを見つめておられ、それを果たす、完成させることだけのために働いておられるのです。ですからイエシュアはその御方のことをアーヴ、すなわち神の家、神の国と呼ばれ、ご自身もそのことのためだけに働かれるのです。

2. 信じる

6:47 まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。

その神様のご計画を人は見ることはできません。断片的に、或いはぼんやりと、若しくは何か他のものにたとえられた形で見ることはできたとしても、イエシュアが見ているようには見ることはできません。「誰も父を見た者はない」とはそういう意味だと思われます。ですから見るのではなく「信じる」こと、これが人に与えられる権利だと考えられます。「信じる」はヘブル語でアーマン(אָמַן)です。このアーマンが最初に使われる出来事が創世記 15:6 に記されています。

創世記

15:5 そして、彼を外に連れ出して仰せられた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」

15:6 彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

これは神様がアブラハムに与えられた約束です。少し余談になりますが星の数ほど、という表現がありますが現在の天文学の計算では、私たちの住んでいる地球が存在している銀河系だけでも約千億から二千億の星があるそうです。そしてそのような星の数を持つ銀河系が、この宇宙全体には約千億あると言われています。アブラハムはその星の数を数えるどころか見渡すことさえできませんでした。しかし彼は「信じた」のです。神様が何をなさそうとおられるのか、見えない、解らないけれど、そのご計画は必ずそうなる、実現するとアーマン、信じたのです。アーマン(אמן)を構成するヘブル文字を見てみますと

アーレフ(א)…力ある神

メム(מ)…水を象った文字。永遠、真理という意味があります。

ヌーン(נ)…魚を象った文字。規定、子孫、繁栄という意味があります。

これら三つの文字の意味を組み合わせると「神の永遠の掟、永遠の繁栄」という意味があると考えられ、これもまた、神様のご計画を指し示すものであると考えられます。そしてそのためにアブラハムが、イスラエルの民が選ばれたという事実もまた、忘れてはならない重要な神様の規定だと思われま

3. パン

6:48 わたしはいのちのパンです。

イエシュアはなぜご自分をパンにたとえられたのでしょうか。パンを意味するヘブル語レヘム(לחם)は創世記 3:19 で初めて登場します。

創世記

3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」

ここで糧と訳されているのがレヘムです。このレヘムを得ることによってもたらされる結末は、「土に帰る」ことだと記されています。神様が人をお造りになる前、つまり一番最初に戻るといふ意味と捉えられます。「全く初めから、もう一度やり直す」それがレヘムの持つ意味だと思われま

ラーメド(ל)…杖を象った文字。「習う、学ぶ、訓練する」という意味があると考えられます。

ヘット(ח)…柵を象った文字。「人の歩み、人生」を意味すると考えられます。

メム(מ)…水を象徴する文字。「真理、永遠」という意味があると考えられます。

これら三つの意味を統合すると、「永遠、真理に生きることを習う」というメッセージを導き出すことができ、真理とは決して変わることはないものを意味しますから、「永遠に変わることはない状態で生きる」ようになることが示されていると考えられます。またラーメドが表す杖は、権威の象徴でもあるため、「神様の絶対的

な権威と支配の下で生きる」とも解釈できます。創世記の 1:2 にこう示されています。

創世記

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、**神の霊が水の上を動いていた。**

神の霊は水の上にある、混ざり合っていたのではなく、権威者のように、保護者のように、一線を画した状態、柵を象徴するヘットをおいたような状態で水の上におられたと考えられ、その様子がこのレヘム(מְהֵמָה)の三つ文字の中に描かれているように見えます。まさに究極のやり直し、天地創造の前に戻って、全く初めからやり直す、そのような意味がパン、レヘムには隠されていると考えられます。これらの事実を食べる、つまり受け入れる者、信じる者は永遠のいのちを与えられるのです。

6:49 あなたがたの父祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。

6:50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。

マナ(ヘブル語発音ではマーン(מָן))を食べても死ぬ、これはどういう意味でしょうか。マーンとは「何だこれは？」という意味です。

出エジプト

16:15 イスラエル人はこれを見て、「**これは何だろう**」と互いに言った。彼らはそれが何か知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これは主があなたがたに食物として与えてくださったパンです。」

神様のご計画に対してマーン、「何だそれは？何それ？知らん、解らん」であってはならないのです。大切なのはマーン(מָן)ではなく、「信じる」こと、マーンの頭に神の文字であるアーレフ(א)をつけた神のマナ、本当のマナ、アーマン(מָאן)だとイエシュアは言うておられるように思えます。

黙示録

3:14 また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ、『**アーメンである方**、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。

アーメン(ヘブル語発音ではアーマン)は、「アーメンである方」とあるように、「信じる」という意味だけでなく、イエシュアご自身を指し示す言葉でもあります。つまりイエシュアを信じることを指し示す言葉です。そしてそのイエシュアの一体何を信じるのかが聖書の最後に記されています。

黙示録

22:20 これらのことをあかしする方がこう言われる。「**しかり。わたしはすぐに来る。**」アーメン。主イエスよ、来てください。

黙示録の最後の御言葉、つまり聖書の最後の御言葉「わたしはすぐに来る」というイエシュアのこの言葉に私たちの信仰、アーマンは向けられるべきなのです。確かにイエシュアは旧約聖書に預言された神の御子であり、

多くの奇蹟を行い、私たちの罪の身代わりとして十字架にかけられ、死んで三日目によみがえられました。しかしそれはあくまで通過点、絶対に必要なプロセスの一部ではありますが、最終目的ではありません。神の国、御国をこの地に建てるために、再びこの地上に還って来られる、いわゆるイエシュアの地上再臨「わたしはすぐに来る」にあると考えられます。ですからイエシュアは次の箇所、ご自分を「天から下って来た生けるパン」と言い換えられています。

4. 肉

6:51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」

そして今度はイエシュアはご自分を肉にたとえられ始めました。肉、バーサール(בָּשָׂר)は、創世記 2:21 で初めて登場します。

創世記

2:21 神である主は深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。

これは神様はエバを造られる際、アダムの脇腹を裂いて彼の肋骨を取り出しました。そしてその後、裂いた部分の肉を再びふさがれました。ここでもし肉がふさがれなかったとしたらどうなっていたでしょう。当然そこから血が流れ出したことでしょう。人の身体は、肉が血を覆う形で成り立っています。つまり肉の下に血ある、血の上に肉があるのです。これは、レーム同様、神の霊が水の上にある、という創世記 1:2 を指し示していると考えられます。そして神様はアダムに深い眠りを与え、肉を裂いて、またふさぐとあることから、イエシュアの十字架の死と復活の意味も含まれていると考えられます。バーサールが創世記 1:2 を指し示している、血と水が同義であることはイエシュアの十字架の場面からもうかがい知ることができます。

ヨハネ

19:34 しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。

イエシュアが十字架で息を引き取られた時、兵士がイエシュアを槍で突き刺しました。それが脇腹、つまりあばら骨のある部分を突き刺していることもアダムのあばら骨の出来事と密接につながっていると考えられます。このように、パン、そして肉には、永遠のいのちを得るためには、天地創造の前からのやり直し、つまり再創造、そしてそれにイエシュアの十字架の死と復活を信じ受け入れることは必要不可欠であることが示されていると考えられます。

ガラテヤ

6:15 割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なのは新しい創造です。

そして、新しく創造された者とは、アダムの脇腹を裂いてエバが造られたように、十字架によってイエシュア

の脇腹が裂かれたのですから、そこから造られる者はイエシュアの妻、キリストの花嫁です。バーサールを構成するヘブル文字も見てみましょう

ベート(ב)…家を象った文字。神の家、御国を直接的に指し示す文字と考えられます。

スィーン(שׁ)…歯を象った文字。食べる、肉体(人の形)を意味する文字と考えられます。

レーシュ(ר)…頭を象った文字。思考、計画を意味すると考えられます。

これら三つの文字の持つ意味を統合すると「御国は、肉体に啓示されている」というメッセージを導き出すことができると考えられます。これを食べる、すなわち信じ、受け入れることなしに永遠のいのちはありえないということが示されていると考えられます。

5. 血

6:52 すると、ユダヤ人たちは、「この人は、どのようにしてその肉を私たちに与えて食べさせることができるのか」と言って互いに議論し合った。

6:53 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。

6:54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。

6:55 わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです。

この肉、バーサールをまことの食物とし、それに加えて、血とたとえられたまことの飲み物のことが提示されています。ヘブル語で血はダーム(דָּם)と言います。

創世記

4:10 そこで、仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。

この記述はアダムの息子、カインとアベルの出来事です。兄のカインは、弟のアベルのささげ物だけが神様に受け入れられたことに怒り、嫉妬し彼を殺しました。その時流された血が「わたしに叫んでいる」つまり神様に向かって叫び求めていることが記されています。このように、血、ダームには「神様を呼び求める人」という意味が込められていると考えられます。イエシュアをアーマン、信じる者、そしてイエシュアを「呼び求める者」に永遠のいのちが与えられるということが示されていると考えられます。

黙示録

22:20 これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーマン。主イエスよ、来てください。

神様のご計画の完成、イエシュアの再臨を信じ、それを「来てください」と呼び求める、待ち望むことが、私たちに与えられた役割であることが示されていると思われまます。

6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。

イエシュアの肉、そして血は普通のそれとは違い、トイレで排泄されるようなことはありません。つまりイエシュアを信じ、そして求める者が、救いからもらえることはもちろん、何かの理由でそれを途中で失うようなことは、決してないということです。そしてこの「とどまる」という言葉はヘブル語でヤーシャヴ(יָשַׁב)で、「住む」という意味ですから、神様のご計画である神の家、神の国、御国に住まうことが示されていると考えられます。

6. 御霊によって

6:57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、**わたしによって生きる**のです。

6:58 これは天から下って来たパンです。あなたがたの父祖たちが食べて死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます。」

わたしによって、すなわち「イエシュアによって生きる」、これが人に与えられた、永遠に生きる唯一の道です。

使徒

4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」

6:59 これは、イエスがカペナウムで教えられたとき、会堂で話されたことである。

6:60 そこで、弟子たちのうちの多くの者が、これを聞いて言った。「これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか。」

6:61 しかし、イエスは、弟子たちがこうつぶやいているのを、知っておられ、彼らに言われた。「このことでああなたがたはつまずくのか。」

この時イエシュアにはあの 12 弟子以外にも、多くの弟子がいました。会堂に入ることができたのでみなユダヤ人であったと思われます。そのユダヤ人たちがイエシュアの言葉につまずきました。わたしの肉を食べ、血を飲む、というような言葉に不快感を覚えたとも考えられますが、ユダヤ人のラビ、教師たちはよくたとえを用いて話します。ですからこれがたとえであることはユダヤ人であるならば解ったはずです。ヘブル語を使い、旧約聖書を知る彼らならば、私たち以上にイエシュアの語っておられることの意味を理解することができて当然のはずです。ですから彼らは「解らない」と言ったのではなく「聞いておられようか」すなわち聞きたくない、従いたくない、アーマンしたくない、信じたくないと言ったのです。

6:62 それでは、もし人の子がもといた所に上るのを見たら、どうなるのか。

ユダヤ人たちはイエシュアを、つまり神様のご計画を拒絶しました。それによりイエシュアは十字架にかけられ、死んで三日目によみがえり、天に上ることになります。

6:63 いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。

イエシュアが天に上り、それに代わって御霊、聖霊が下って来ることが示されていると考えられます。聖霊の助けによって人はイエシュアの語られたことば、つまり神様のご計画を信じることができるからです。ここで語られている肉はイエシュアの肉のことではなく、生まれながらの人間のやがて朽ちていく肉です。

I コリント

2:14 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

私たちが今イエシュアを信じていることができているとすればそれは、肉の目で見たり耳で聞いたり、肉の身体に感じて信じているのではなく、御霊によって信じているのです。イエシュアによってしか救われることがないように、御霊によってしか、イエシュアを信じることができないのです。ですからたとえヘブル語を知っていたと、聖書を知っていたと、この時のユダヤ人たちには、イエシュアの言葉を理解するどころか、信じることなどできるはずもなかったのです。

7. 選び

6:64 しかし、あなたがたのうちには信じない者がいます。」——イエスは初めから、信じない者がだれであるか、裏切る者がだれであるかを、知っておられたのである——

6:65 そしてイエスは言われた。「それだから、わたしはあなたがたに、『父のみこころによるのでないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできない』と言ったのです。」

6:66 こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去って行き、もはやイエスとともに歩かなかった。イエシュアは父を見た、すなわち神様のご計画のすべてを知っておられる御方です。ですから誰が信じるか、或いは信じないか、神の国に入る者かそうでない者かを知っておられます。

6:67 そこで、イエスは十二弟子に言われた。「まさか、あなたがたも離れたと思うのではないでしょう。」

6:68 すると、シモン・ペテロが答えた。「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」

6:69 私たちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています。」

ユダヤ人たちが離れて行ったのに対し、ペテロはイエシュアを信じると言い切っていますが、この時点ではまだ聖霊によるものではないため、後にペテロも 12 弟子の誰もがイエシュアを裏切ります。そして聖霊が来ることによって初めて変えられるのです。

ヨハネ

16:12 わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。

16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は

自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。

御霊はただ信じさせるだけではありません。やがて起ころうとしていること、将来における神様のご計画について示してくださいます。

6:70 イエスは彼らに答えられた。「わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかしそのうちのひとりは悪魔です。」

6:71 イエスはイスカリオテ・シモンの子ユダのことを言われたのであった。このユダは十二弟子のひとりであったが、イエスを売ろうとしていた。

「わたしが…選んだ」と言われるように、人に永遠のいのちが与えられる、救われる、神の国に入るために最も必要なこと、それは聞くこと、信じること、理解すること、それ以前に「神様に選ばれているかどうか」ということです。これはすべて天地創造の前から立てられた神様のご計画によるのであって、これに対して人の力も知恵も、意志も、そして弱さも愚かさも全く口を挟む余地がなく、無力なのです。すべては初めから定まっていて、一つも違わず成就する、それが神様のご計画です。これについてイエシュアも、そして聖霊も全くの同意であり、そのご計画に勝手に何かを付け足したり、省いたりして変えることは絶対にありません。もしそうでなければ神様はこれから先誰がイエシュアを信じるか、誰が神の国に入り、ご自分とともに生きる者となるのかをまだ知らないということになり、そんな不確定要素のあるものを計画とは言いません。厳選された材料、人材を用い、緻密に計算された順番と行程を経て完成するものなのです。その偉大なご計画の前では、人の罪もサタンも、そして死さえも、駒の一つにしかすぎないのです。それほどまでに神様は偉大な偉大な御方であるということ、イエシュアは言おうとしておられるのではないかと思います。